

## The Green Lab in the Brown Land

小島志保子<sup>✉</sup>

Department of NeuroscienceUT  
Southwestern Medical Center

### “We might be moving to Texas.”

2009年3月某日金曜日、恒例のラボミーティングはボスのこんな言葉から始まった。向かいに座っている大学院生は私に向かって“*What the hell (いったいどういうこと) !?*”と聞く。私は肩をすくめて答えた。“*I don't know...*” だって、本当に何にも聞かされていないだもん・・・。

私のボスであるDr. Carla Greenは1997年にAssistant ProfessorとしてUniversity of Virginiaに赴任、12年間にわたって教鞭を取った後、UT Southwestern Medical Center (UTSW) へと異動した。アメリカ東海岸に位置するバージニア州シャーロットビルから南部テキサス州ダラスまで約1200マイル (約2000km、直線距離にして青森県から沖縄県那覇市に相当)、アメリカ大陸の約半分を横断したことになる。アメリカにおいては、このようにラボ自体が移動することは決して珍しいことではない。その理由は多岐に渡るが、主なものとしては、PI (Principle Investigator = ラボのボス) が実家に近いところに住みたい、(PIの) 上司と馬が合わない、学科の方向性に賛成できない、配偶者や家族の希望、等があげられる。ただやはり一番大きな理由は、よりよい研究環境を求めて、もしくは移動先での昇進が約束されている、といったものであろう。

冒頭の爆弾発表があった後、当時ラボに在籍していた人間はその日のうちに一人一人個別にボスと面談を行い、今後の進路やそのオプションについての話し合いがもたれた。当時私は日本に職を見つけるべきか否か悩んでおり、ボスが異動するならこれはこれで日本に帰れという神のお告げなのかな、などと考えていた。さらにいえば、朝のラボミーティン

グでのアナウンスを鵜呑みにすれば、テキサス行きはその時点で100%の決定事項ではなく、今後に含みを持たせた言い方でもあった。そんなこともあり、元来楽天的な私は、“ま、テキサスに本気で移ると決まったら、そのときどうすればいいか考えればいっか”などと考えていたのである。そうこうしているうちに、予定の面接時間が来た。ボスのオフィスに向かい、ノックして中に入る。私が席に着き、開口一番ボスが放った言葉は“*You have to come with me.*”であった。中学英語で習うようにhave to ~は「~しなければならない」と訳され、かなり強い命令の言葉である。自主性を重んずるアメリカにおいて、have to という表現は自分のためには用いても、普通他人の行動には用いない (親から子等例外はあるが)。予想だにしていなかった言葉に面くらった私は防戦し、さらに攻撃に転じなければならぬ。どのくらいの確率でテキサスに行くつもりか聞くと、50:50だという。それなら、私行かなくたっていいかもしれないじゃ〜ん、と答える。さらに聞くと、テキサスに行きたいのは仕事上の理由だと言う。じゃ、バージニアに残りたい理由は何なの?と聞くと、仲のいい友達と離れるのはつらい、とのことである。その瞬間、私はテキサス行きは表面上は未確定でも、彼女の中では既に決定事項なのだと悟った。

その日から実際に引越しが完了する7月末までの正味4ヶ月間、ラボはカオスと化した。ラボ内の荷物をまとめ、要らないものは処分し、必要なものを選別する。さらに、輸送業者と話し合いを行い、ネズミ、ラボ機材、サンプル等の輸送の段取りを進め、テキサスで雇わなくてはならないスタッフの選考、面接を行う。面接に関しては非常に細かいルールがあり、少しでも個人情報に関することで業務に

✉Shihoko.kojima@utsouthwestern.edu

関係ないことを聞くとあとで「違法だ！」と訴えられる可能性がある。それを防ぐために地元の図書館へ行き、厚さ3cmほどもある法律関係の本を一冊読んで対策を練った。幸か不幸かこの4ヶ月間、ボスは学会等でほぼMIA (missing in action) で、スタッフの面接も私自身が行わなければならなかったのである。引越はラボだけでなく自分の個人的な住まいにももちろん及ぶ。当時私の住んでいたアパートの契約は年度の途中であり、中途解約をすると多額のペナルティーを払わなくてはならない。そこで、契約が終わるまでの間そこに住んでくれる人を探さなければならず、これまた相当な労力を要した。個人の持ち物の引越しに関しても業者と細かな打ち合わせを行わなければならなかった。どのくらいの広さの場所にすんでいるのか、子供はいるか、子供用の大きな遊具 (例えばトランポリン、裏庭におくブランコ等) はあるか、そして当然、銃を所持しているかについても聞かれた。

ラボと自分自身の荷物をトラックに積み込み、それを送り出して終わりではない。その後にはさらに約2000kmの長距離ドライブが待っているのである。全ての荷物を送り出した午後6時、はるかテキサスに向かって私はドライブを始めた。私の体の疲労はほぼ限界に達しており、この旅はお世辞にも楽しいものとは言えなかった。途中で立ち寄った街で車の鍵を紛失し、警察の厄介にもなった (アメリカでは鍵の紛失はJAFのような組織ではなく警察に頼むようだ)。また、先にテキサスに着いているはずの大学院生から電話があり、UTSWが我々の液体窒素タンクの用意をし忘れ、冷凍サンプルの行き場所がない、と言ったりする。またある日は、太陽が地平線の向こうに沈んでいくのを刻々と目視できるにもかかわらず、ホテルがある街に一向にたどり着かない。ホテルの予約もしていない。ガソリンはほぼ空なのにも関わらず、給油もできない (給油スタンドのある街にも遭遇しない)。私はこのただっ広い草原のどこかで今日は野宿? と一瞬覚悟したこともあった。

すったもんだの末、バージニアを出発して一週間と2000km後、ダラス市内に予定していた住まいに無事到着した。テキサス州ダラスはその周辺都市を含めたDFW (Dallas- Fort Worth) Metroplexとして全米第4位の人口を誇る大都市圏を形成し、商工業都市として名を馳せている。ダラスはまた、合衆

国第35代大統領J.F. Kennedy氏が1963年に暗殺された街として多くの人々の記憶に残されている。暗殺者が銃弾を放ったとされている建物 (通称“教科書ビル”) は現在博物館として機能しており、実際に氏が凶弾に倒れた地点にはX印が残されている (余談だが、彼の死亡はUTSWに併設するParkland Memorial Hospitalで宣告された)。また、第43代大統領であるGeorge W. Bush氏は大統領職の任期を全うした後ダラス市内に居を構えており、運がよければ本人若しくは夫人が散策しているのに出くわすこともできる。ダラスはスポーツの街としても知られ、アメリカの4大プロスポーツリーグ (NFL: アメリカンフットボール、NBA: バスケットボール、MLB: 野球、NHL: アイスホッケー) の全チームを抱える。2012年ガルビッシュ有の加入により俄然日本での知名度を増したTexas Rangersのみならず、2010-2011シーズンでNBAチャンピオンに輝いたDallas Mavericks、また成績はぱっとしないものの人気だけは高いDallas Cowboysなど、スポーツファンには垂涎の街である。

そのダラスのほぼ中心部に位置するUTSWは、1949年の創立以来5人のノーベル賞受賞者を輩出し、当時数百人程度のポストドクが研究に従事している。UTSW内には元々、赤パンカビの分子時計機構に明るいDr. Yi Liuや、オレキシシンとナルコレプシーのDr. Masashi Yanagisawa、NPAS2のDr. Steven McKnight等、時間生物学に造詣の深い研究室がいくつ也存在していたが、2009年にDr. Joseph Takahashi がNorthwestern UniversityからUTSWへ異動し、Department of NeuroscienceのChair (日本の学科長に相当) に着任したのに伴い、時間生物学への理解が急速に深まったように見受けられる。また意外に思われるかもしれないが、UTSW外でもテキサス州内には時間生物学研究に従事するラボが相当数存在する。例えば、Texas A&M Universityにはハエの分子時計に詳しいDr. Paul Hardin、赤パンカビの分子時計解析のDr. Deborah Bell-Pedersen、SCN細胞株を樹立したDr. David Earnest らが、ヒューストンにはPeriod1遺伝子を発見したDr. Cheng Chi Lee、マウス分子時計に影響を与える低分子化合物解析のDr. Jake Chenまた、概日時計とガンとの関連性を調べているDr. Loning Fuなどが在籍している。こういった面々とは、年に一度SECTS (Southeastern and Central Texas Society) for Clocksと呼ばれる会合で顔をあわせ、

ざっくばらんな雰囲気の中、活発な議論を交わすことができる。

Takahashi LabとGreen Labはラボの規模こそ大きく違うが、UTSWに移動した時期も、また研究の内容もそうかけ離れてはいないため、行動を共にすることが多くある。我々自身はお互いを“姉妹ラボ”だと思っており、試薬の貸し借りはもちろん、ラボミーティングも合同で行われる。Joeに関しては時間生物学会の会員の方々に改めて説明する必要はないと思われるが、時間生物学研究における第一人者である ([http://en.wikipedia.org/wiki/Joseph\\_Takahashi](http://en.wikipedia.org/wiki/Joseph_Takahashi))。あえて付け加えるとすれば、Joeの叔母にあたる方は著名なピアニストだったそうで、「原智恵子」でYoutube検索すると彼女の生前の演奏を聴くことができる。

CarlaとJoeが共に強調するのはプレゼンの重要性である。どんな聴衆、読者であっても理解できるプレゼンをすることが必須だと思っているし、受け手側もそれを期待する。道理でアメリカ人はプレゼンがうまいわけだ。ラボの大学院生（アメリカ人）に言わせると、「アメリカ人はバカなので、かみくだいてやらないとわからないの。」ということらしいが、自分の論文・研究を他人に理解してもらって共



図1：Joe生誕60周年記念祝賀会。サプライズパーティーだったため、企画は秘密裏に進行した。(2011年12月) A：赤いちゃんちゃんこを着せられたJoeが参加者にケーキを切り分ける。左隣は我がボスCarla。B：還暦は日本の習慣なので遺伝学的日本人が集合。左よりDr. Mariko Izumo、Dr. Joseph Takahashi、Dr. Nobuya Koike、右端が筆者。ちなみにアメリカではHalf Centuryすなわち50歳の誕生日の方が盛大に行われる。C：この日のために特注されたケーキ。右奥にマジパンで作られたアクトグラム、左奥に時計、そして計三匹のマウスが見てとれる。D：Takahashi Labのテクニシャン、Chryshanthiが作ってくれたアペタイザー。個々のマウスは半身の卵、耳はスライスアーモンド、尻尾はブレッツェルで出来ている。

感を得るためには、そういった努力は必要不可欠なのだろう。私自身のラボミーティングにおける発表でさえ、英語の用法までも直される。論文も私が何気なく使った一つの単語の本来の意味と、別の似通った単語との違い等、かなり詳細に説明してくれる。外国人なんだし少しくらい大目に見てくれてもいいのに、と思うこともあるが、いったん論文を書き始めればそんな言い訳は通用しない。毎回ありがたうお言葉を頂戴している。

Carla個人に限って言えば、やはり女性ならではのきめこまやかな気配りが大きな特徴だと思う。常にラボのメンバーがハッピーであるかどうかを気にかけ、そうでないときには理由に関わらず話を聞き、どうやったら状況が打開できるか相談にのってくれる。また、彼女の教育力には定評があり、University of Virginiaで学部生の指導を受け持っていたときにはDistinguished Teaching Award（学生の投票によるベスト授業をする教授No. 1）に輝いたこともある。医科単科大学に移動し、学生がその享受を受けられないのは個人的には少し残念だ。さらに、彼女は個々の自主性を非常に重視する。相手が学生であろうがポストドクであろうが、助言はするけど最終的に決めるのはあなたよ、という姿勢は常に一貫している。必要最小限の方向の示唆はするが、それ以外はほぼフリースタイルである。これは賛否の分かれるところだとは思うが、私個人の性格には非常にあったスタイルであった。逆に言えば、例えばボスに与えられたテーマで実験をして、そして結果を出す方がいいというタイプの方々には向かないラボであろう。

実験の結果はもちろんのこと、予期せぬ出来事が起こるのが海外生活である。2012年5月のある金曜日、普段はめったに鳴らない私の携帯電話が鳴り出

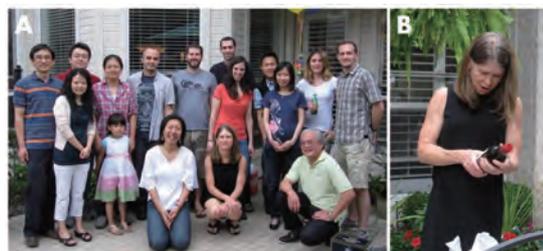


図2：Carlaの生誕？周年記念パーティー、於Green家。A：Green Labの新旧メンバー（とその家族）。旧メンバーは全米各地から集まってくれた。B：我々からの誕生日プレゼントに驚くCarla。ギフトは彼女の生誕年に作られたビンテージワイン。

した。電話に出ると相手はアパートの管理責任者で、非常事態なので可能であれば今すぐ家に帰ってきてほしい、という。どういうことかと詳しく聞くと、上階から漏水しており、私の部屋にすべて水が落ちているようだという。管理会社には鍵を預けてあったはずなので、勝手に入ってもらって構わないので今すぐにも状況を確認してほしいという、「鍵が見つからなくて・・・。」とのこと。何のための管理会社かと呆れたが、今ここで管理責任者相手にぶつぶつ言ってもしょうがない。ラボから車で約10分ほど離れた自宅に直行した。管理会社の立会いのもと、鍵をあけて中に入ると、確かに天井からかなりの量の水が滴っている。あまりの出来事に啞然としていると、管理責任者が「とりあえず保険会社に連絡した方がいい。ホテルに泊まらないといけないうにしても保険会社に連絡しないことには始まらない。」という。さらに細かい今後の対処について責任者と話をしているさなか、ドシンという音と共に天井が崩落した。これはしゃれになっていない。とりあえず身の回りのものをかき集め、友人宅に避難することにした。これまた呑気な私は、当初2-3日もすれば帰ってこれるだろうと考えていたのである。この先3ヶ月半もの長期間、ホテルに滞在することになるとはそのときの私には思いもつかなかったのだ。



図3：上階からの漏水のため天井が抜けた我が家(2012年5月)。

保険会社に連絡をすると、すぐにAdjuster(保険会社からの依頼で損害額の調査を行う専門家)がやってきた。部屋の簡単な見取り図を描き、被害がどの程度広範囲にわたっているのか調査する。同時に漏水専門の清掃会社を呼び、私に当座の修復費用として\$2000の小切手を手渡した。一般的にアメリカ人は預金残高が通常0なので、このような多額(!?)の現金の支払いにはすぐには対応できない。それでとりあえずの必要経費は保険会社からすぐに支払われる仕組みになっているようだ。Adjusterはまた、事故の詳細な原因を告げてくれた。実は上階の住人は電気パネルの修理中で、その間何らかの理由でパネルが爆発し、火災報知機がそれを感知し、スプリンクラーが作動し始めた。慌てた上階の住人と、電気修理技師は自分たちで水を止めようと走りまわったのだが結局それはかなわず、1時間以上散水し続けたとのことであった。事故が起きたことは仕方がない。彼らもまさかこんなことになるとは想像だにできなかったであろう。そのための保険である。Adjusterも「上階の住人の保険から全て支払わせる」という。当然である。しかし、これまた後に私の見通しの甘さを露呈する結果となるのである。

まず修理に時間がかかった。最初に、私自身が修理を請け負ってくれる施工業者を探さなければならない。言わずもがな、異国で信頼できる業者、しかも複数(金額を比較するため)を探すことは容易でない。当然、保険会社は金額を抑えるべく、独自の業者から別に見積もりをとる。ちなみに私の選んだ業者Aの見積もりは\$24K、業者Bは\$16K、対して保険会社の見積もりは\$10Kであった。結局業者Bが\$10Kでやってくれることになったが、本当の適正価格は私にはわからない。費用の面でようやく合意し、いざ修理が始まった。もちろん日本のように全てことがスムーズに進むわけがない。天井や壁をはがすと、外からは見えなかったダメージが表面化する。もちろん施工業者はその修理をすべきだという。保険会社はその支払いを渋る。アパートの管理会社は建物にどのような修理が施されたのが逐一報告してほしいという。この三者に挟まれた私は毎日のように誰かと打ち合わせをし、その結果を報告し、明日の予定を確かめ、疲れた体でホテルに帰るという日々を過ごした。ちなみにこれと平行して論文のリバイスを2ヶ月間で終わらせなければならなかった。

晴れて修理が完了し、ようやくホテルから住み慣れた我が家に帰った。ほっとするのも束の間、新たな問題が起こる。今度は上階の住人の保険会社が、我が家の修理費用の支払いを拒否したのである。後で分かったことだが、こういったケースはアメリカ全土でよくあることらしい。保険会社の調査によれば、今回の事故の原因は電気パネルであって、住人ではない。したがって、彼に法的な過失は一切ない、というのが理由である。これにはさすがの私も頭にきた。私は全くの被害者であり、びた一文払うつもりはない。それでなくても不自由な生活を強いられ、余計な支出もかさみ、慰謝料すら受け取ってもおかしくない状況である。一応、私自身の保険があったので修理費用は全額カバーされるようだったが、そのためには私が免責分（\$1000）を負担しなければならないという。私はすぐさま、上階の住人の保険会社に連絡し、事故は彼の住居から発生しており、広義には彼に過失があると主張する。しかし保険会社は、法的には彼に過失はない、の一点張りで埒が明かない。法律の専門家にも相談し、Small Claims Court（小額の案件のみを迅速に処理する裁判所）へ訴訟を起こすことも考えたが、Small Claims Courtにはその判決に対して強制能力がないこと、また保険会社の決定は違法ではないことの二点より、断念せざるを得なかった。次に上階の住人に直談判した。いくら法的責任能力がなくても、大方の人間は申し訳ないと思うものだし、全額は支払わないかもしれないが、多少の援助をしてくれる場合が多いと聞いたからである。Emailで状況を説明し、多少なりともContribution（寄附）する気があるかとたずねた。彼からの返事が、また度胆を抜かれるものであった。「それは私には何の関係もない。したがって支払う気は毛頭ない。」という内容だったのだ。ちなみに彼は事故当日、我が家まで様子を見に来た。あくまで様子見、である。謝罪に来たのではない。ご存知の方も多いと思うが、ここアメリカでは謝罪の言葉を口にすることは、自分に過失があるのを認めることと同義である。したがって、事故の原因が法律上確定するまでは決して謝罪の言葉は口にしないのである。頭では分かっているけれども、こういった対応は、被害者感情からするとかなり不愉快であった。とにかく腹の虫がおさまらない私は次なる手段に出た。Texas Department of Insurance (TDI) に不服を申し立てたのである。TDIは州が管理する組織で、保険が正当に適用さ

れ、補償されているかを取り締まる機関である。初めは半信半疑だったが、不服の申請には料金が不必要だったこともあり、だめもとで書類を申請した。すると一週間もしないうちにTDIからは調査開始のお知らせが届き、二週間後には保険会社から「申し訳ありません、すぐさま小切手をお送りします。」との電話が届いた。これにはさすがに驚いた。その後また一週間ほどして実際に手元に小切手が届き、事故発生から7ヶ月半後、ようやく一件着落と相成ったのである。

これらの出来事より私が学んだのは「人生何が起こるかかわからない」である。海外に居住の場合はおさらだ。突然の出来事に母国語以外で対応するのもこれまた骨の折れる作業であった。経験のある方には共感していただけたと思うが、最初は電話での会話ほど嫌なことはなかった。音以外に相手とコミュニケーションをとる手段がないのだ。さらに、引越しや建築素材に関してのボキャブラリーは率直に言って幼児レベルである。しかし、これがまたアメリカのいいところでもあるのだが、聞けば丁寧に答えてくれる。逆に質問を投げかけなければ理解しているものとみなされてしまうのである。私も日本人、最初はいろいろ聞くのには躊躇した。大体英語が聞き取れずに何が理解できないのかすらあいまいな場合も多くあった。しかし、彼らの言うように“*No question is stupid*”。それを心に留め何でも分からないことは聞き続けた。おかげで、今では大体のことは理解できるし、ことの大小はあれども、大方のことには対処できると自負している。

ここでは、あえて研究そのものには焦点をあてなかった。最近の個々のラボの研究内容についてはインターネットに情報が氾濫しているし、この号が印刷される頃にはここに記された情報の全ては古くなってしまっていることが容易に想像がつくからである。ここでは主にインターネットからは得られない情報をお伝えすることに専念したつもりである。日本人は大体手先も器用で勤勉、少なくとも私のまわりでは日本人ポストドクで重宝されてない人を見たことがない。日本人の海外研究生活でむしろ重要になってくるのは研究以外の部分のような気がする。生活基盤が安定しなければ、コンスタントに結果を出すのは難しいと思うのだ。だからこそこれから海外に出て自分の力を試してみたいと思っている方々には、研究そのもの以外にも障害はいろいろあるの

だ、ということをお伝えしたかった。住み慣れた日本から離れるということは、自分にふりかかるかもしれない災難も、グローバルスケールになる。「日本では～なのに、」という言い訳はここでは通じない。ただし、人間関係や言語、生活に関する知識等、得るものも非常に多く、海外生活はかけがえのない人生の1ページになることは間違いない。近年

は海外に職を求める人があまりいないと様々なところで聞きするが、食わず嫌いする前に一回試してみてもいいんじゃない?とってやまない。このエッセイが躊躇している方の背中をポン、と押すことができたならこの上なく光栄である。ま、あんまり良い経験書いてないけど。